

受容することをめぐって

津守 真

近頃、大人が子どもを受容するというのでは不十分で、大人も遠慮なしに感情を子どもにぶつけることが必要だという議論をきくことがある。私も大人が一方的に我慢して子どもにしたことをやらせるといふのではおかしいと思う。

それでは大人が、「危ないから」「汚いから」やめなさいと、直ちに口を出せばいいかといえ、そうではない。それは大人の側の枠に大人が反応しているのであって、そこには相手の人間が不在である。それが教室という密室の中で行われると恐ろしい。保育者には、子どもの側に身をおいて見る自制心がなければならない。子どもには子ども自身の考えがあることを認め、ひとつひとつの行為の中にひそむ子どもの思いを発見しようとする知性が、その自制心を生む。

そして更に、相互にやりとりする中に、子どもの姿は一層はっきりとあらわれる。受容

という語だけではあらわせない、継続する中で深められる関係が保育である。

こんなことを考えていたとき、私は次のようなことに出会った。実践の場にいると、考えていたことがすぐに確かめられるのでありがたい。

一、

A夫がはじめて私共のところに来たとき、庭の溝の端にはめてある四角い格子の穴にまつまっている土をひとつずつ落として、穴が通るようにした。それからその格子を持ち上げて地面に置くと、その格子にひとつずつ丁寧に土をつめた。全部つめるとその格子を持ち上げて、またその土を全部落とし、穴が通るようにした。A夫は何度もそれを繰り返し続けた。

私は、はじめ、この子が何をしようとしているのか分からなくて、格子を持ち上げようとしたときには、「取れない」「危ない」と言って、手伝うのをためらっていた。そんな私にはかまわずに、A夫は苦心して重い格子を持ち上げ、穴に土をつめたり落としたりを繰り返したのだった。それをやりながら、私はこの子の耳が聞こえないことに気が付いた。

この子は聾学校の幼稚部にいて、私共のところには毎週一日だけ来ている。私は、この行為は耳の聞こえない子どもには特別な意味があるのではないかと思った。

コミュニケーションとは、向う側との間につまった妨げを取り除いて、気持ちや意図が相手と通じることである。耳の聞こえない子どもにとって、相手とコミュニケーションを

通じさせたいとの願望は、普通以上に強いだろう。そう考えたとき、この遊びに協力しようという気持ちがある中にはっきりと湧いてきた。この遊びはただのいたずらではない。子どもの真剣な行為である。困られるという大人の観点からだけ見てはならない。

二、

数か月後、私がA夫と半日過ごした日、朝登園したA夫は裏庭にとんでゆき、マンホールの丸い鉄の蓋を持ち上げてあげようと試みた。蓋は重くて地面にしっかりと付着していた。A夫の力では動かず、私に手伝ってくれと要求した。いつもA夫は他の保育者を相手にして同様のことをしているのを見ていたので、私も蓋をあげようと試みたがうまくいかない。するとA夫は室内の道具箱からドライバーをとって来て、それをこにして蓋をあけ、私もそれを手伝った。

マンホールの中をのぞくと、土管が横に三本通っており、その中の一本から水が流れこんでいた。A夫は両手を水の流れるほうに振って、あちらからこちらに水が流れているよと私に知らせた。それからA夫は室内に走ってゆき、流しにえのぐを流して、急いでマンホールにもどった。これでどの流しの水がどの土管につながっているかを目で確かめることができる。裏庭にはマンホールがいくつもある。A夫はひとつの蓋をしめると、次のマンホールへとゆき、いくつかの部屋の流しに色を流して、どの土管にどの流しが連絡しているかを調べた。

日頃は、私は地面の表に出ている蓋しか見ていなかったが、この日、私は地面の下に水の流れる経路が入り組んでいることにはじめて気が付いた。私はひとりの実習生とA夫と一緒に、それが面白くなって、どの流しがどのマンホールに流れこむのかを調べて回った。それはもはやA夫ひとりの行為ではなく、私共の共同の行為となった。はじめのうちは、いくらかためらう気持ちもあったのに、いつの間にかこちらの方が先に立って調べていることにわれながら驚いた。やりとりするうちに、子どもの世界が大人にも体験されている。ことは以上に、共通の体験を通してコミュニケーションがなされている。

子どもと応答するやりとりの中で、子どもは知られている。子どもにとっても、大人とやりとりする中で、大人は協力者であることや、大人の周囲に対する配慮・危険に対して払っている注意などを知る者となっているだろう。

受容するというのは、はじめは子どもの行為の意味が分からぬままに、その行為を直ちに否定するのではなく、互いにやりとりするうちに、次第に子どもの思いが見えてくる一連の行為の最初の部分を、外部から見たときの呼称なのではないだろうか。そう考えると、受容するのが良いか悪いかという議論は、その問いの立て方が適切ではない。たいせつなのは、子どもとやりとりする中で、子どもの心の思いを知り、子どもが追求していることを助けるように、互いの関係を深めてゆくことである。

ここに記した次の週にA夫が来たとき、私はこの小論を書いている最中だったが、A夫はこれまで数か月間つづけてきたマンホールの蓋をあけることをやらなかった。他の子どもが絵の具を使う傍で、絵筆をもって描いたり、手に色をつけて手形を作ったり、紙粘土を一杯にこすりつけて遊んだ。A夫の生活はマンホールの水路から次の局面に向かっていくように思われた。ひたすらマンホールに向かって走っていた子どもが、目を上げて大人の顔を見るゆとりが生まれていた。

(愛育養護学校)

